

校長室の窓

第14-3号 (15号)
2014, 6, 13
長野県蓼科高等学校長
金原 正

浅井 洌と「蓼科農学校歌」・「信濃の国」



校長室にこのような額が掲げられています。本校の前身「蓼科農学校」の校歌として作られましたが、新制高校となっても長く歌い継がれ、通称「第一校歌」とよばれているものです。生徒手帳にも現在の校歌と並んで掲載されていますが、生徒諸君は見たことがありますか。最後の部分（左端）には、「昭和十二年 夏日 八十九翁 浅井 洌」と記されています。

仰げば高き蓼科の
山の名に負ふ学舎の
庭に生ひそふ草
花はさまざま咲めとも
大和錦の色みせて
一つに匂へ香くはしく
雲ある峰も塵ひぢより
千里の道も足下より
日毎に進み月ごとに
積み重ねん学びの業
文の林の奥に
月の桂も手折るべし

浅井洌（れつ・きよし）はこの校歌の作詞者です。そして、言わずと知れた、長野県歌『信濃の国』の作詩者でもあります。第一校歌が制定された時期は定かではありませんが、作曲者が本校第3代並びに第8代校長だった市川与八郎であることから、蓼科高校『八十周年記念誌』では、明治35年～36年（1902年～03年）だと推定しています。浅井が『信濃の国』を作詞したのは明治32年（1899年）。北村季晴（すえはる）が改めて曲をつけ、長野師範学校（現信州大学教育学部）の遊戯用の歌として発表されたのが翌年のことです。本校校歌は、『信濃の国』の3～4年後に作られたものということになります。当時、浅井は50を過ぎたばかり、長野師範学校の教師として油がのりきった頃で、最も活躍していた時代であったと思われます。実は、彼は県内で多くの学校の校歌を作っています。60～70校の校歌や「開校式の歌」等を作詞していると言いますから、『信濃の国』とともに、長野県の学校は、まさに浅井洌作詞の歌とともに歩んできたと言えるでしょう。ただその多くは小学校のものであり、上級学校の例は少ないこと、また、先記の『記念誌』の推定が正しければ、比較的早い時期の作品であることなどの点で、手前みそではありますが、ちょっと注目していいのかなと思っています。彼は78歳で師範学校を退職し、以後は自宅のある松本で悠々自適の毎日を送っていたそうです。当時の生活を伝える子孫談に、「頼まれて揮毫（毛筆で書や絵を書くこと）することしばしばだった」とありますので、この額の書もその中のひとつなのでしょう。彼は、昭和13年（1938年）2月27日に



90歳で亡くなりましたから、本校に残された書は最晩年の貴重なものと言えます。

昭和53年(1978年)、農業科の生徒募集停止と時を同じくして現在の校歌が制定され、第一校歌は蓼科高校の「歴史」となりました。現在、校門から入った右側に、この校歌が刻まれた記念碑が建てられています。

←「昭和五十五年三月 母校創立八十周年 農業科完全閉科を記念して」

すごいぞ!先輩!! ~活躍する卒業生~

本校の卒業生で、現在信州大学教育学部4年に在学中の渡邊寿美華さんが、この度「国展」彫刻の部で見事入選を果たしました。「国展」とは、「国画会」(1926年から続く美術家の団体、詳しくは美術の松下先生に聞いて下さい)が主催する日本を代表する公募展で、今年で88回を数える伝統のある展覧会です。彫刻の部では全国で40名が入選し(ちなみに長野県からの入選は4名でした)、渡邊さんは初入選の13名に選ばれました。

5月1日~12まで六本木の国立新美術館で展示され、5月27日~6月1日に名古屋で、6月10日~15日に大阪で巡回展が開かれました。作品は高さ170cmの裸婦像(右)です。

先輩が活躍しているニュースに触れるのはとても嬉しいことです。高校生の皆さんもそれぞれの目標に向かってがんばりましょう。



うれしい話題の後で恐縮ですが…

悲しいできごと

4月号で紹介した生徒昇降口のツバメ、その後卵を産み5羽のヒナがかえって元気に育っていました。巣立ちの日を楽しみに毎日眺めていたのですが、5日の夕方全く姿が見えなくなっていました。どうしたのかと思っていたら、その日の朝、校用技師さんが出勤すると、ヒナが全部地面に落ちて息絶えていたとのこと…。どうやらスズメに襲われたらしいのです。何ということでしょう!親ツバメが2羽、所在なげに周辺を飛び回っているのが何とも痛ましく、やりきれない思いでした。



こんなに元気に育っていました

6月2日夕方の様子



も抜けの殻になった巣

6月6日朝

小池勇助軍医少佐のこと ～沖縄「慰霊の日」を前に～

今年修学旅行で沖縄を訪れる2年生、来年訪問する予定の1年生、そして修学旅行は長崎を訪ねた3年生も、是非知っておいて下さい。

1945年（昭和20年）4月1日、アメリカ軍が沖縄本島に上陸しました。島民を巻き込む3ヶ月近い激しい地上戦の末、沖縄はアメリカに占領されました。日本軍としての組織的な戦闘が終了したのは6月23日（22日という説もある）のこと。この日は沖縄県民にとって特別な日であり、「慰霊の日」と定めています。この戦いで20万人以上（統計のとり方により違いがある）が犠牲になりましたが、約半数に近い9万4000人余は、非戦闘員である一般の県民や子どもたちでした。沖縄戦に関わって、今でも沖縄の人たちの記憶に残る「佐久の人」がいます。修学旅行の事前学習を兼ねて紹介をしたいと思います。

小池勇助：佐久市野沢出身、若い頃には中込駅前で眼科医院を開業していた。

1944年（昭和19年）、軍医として沖縄に配属
翌年、第二野戦病院長・積徳高等女学校看護隊長
同年6月27日（26日という記録もある）、糸洲の壕で自決。享年54歳。没後中佐に昇任



小池軍医が部隊長を務める第二野戦病院に、積徳高等女学校の生徒25名が従軍看護隊（ふじ学徒隊）として配属されたのは、1945年（昭和20）年3月のことでした。彼女たちは、小池隊長のもとで、傷病兵の看護や麻酔を使わない手術の手伝い等の任務についていました。野戦病院は、戦況の悪化に伴って豊見城から糸洲に移動しますが、沖縄日本軍司令部陥落の5日前にあたる6月18日、学徒看護各隊に解散命令が出されます。これは事実上の玉砕命令であり、有名な「ひめゆり」部隊は集団で命を絶つことになりました。「ふじ学徒隊」にも同様の命令が出されましたが、小池隊長は少女たちを最大限壕の中に止め、戦闘が沈静化するのを待ちました。司令部が陥落し戦闘が事実上終了した6月27日（26日）、小池隊長は学徒隊に解散を命じ、隊長としての最後の訓辞を与えます。「皆さんは非戦闘員です。決して死んではいけない。生きて親元に帰りなさい」、「この悲惨な戦争の最後を銃後の国民に語り伝えなさい」、「アメリカは民間人を殺さないから私服に着替えて2、3人ずつ出て行きなさい」と。また、「捕まることが恥ではない。命を粗末にすることが恥だ」と諭したのです。小池隊長自身は生徒たちを壕から送り出した後自決をしますが、「ふじ学徒隊」25名中22名が生き残り、戦争の悲惨さを語り継ぐ活動を続けました。

2001年（平成13年）6月、元学徒隊の6名が佐久市を訪問、野沢南高校の職員・生徒と交流しています。2007年（平成19年）10月には、12名が佐久市内にある小池軍医のお墓参りに来られました。仲里ハルさん（墓参当時80歳、終戦当時17歳）は、「集団での墓参は、今回が最後になるのではないか」、「人間には善悪を判断する力がある。よい行動をするよう努力して平和が続くよう尽してほしい」と願いを込めて訴えました。

2012年（平成24年）、短編ドキュメンタリー映画『ふじ学徒会』が製作され、学徒隊の体験はさらに次の世代に語り継がれることになりました。